

# 槐かい

平成29年10月号

岡井省二創刊

平成二十九年十月一日発行 第二十七卷第十号 通巻第三二六号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

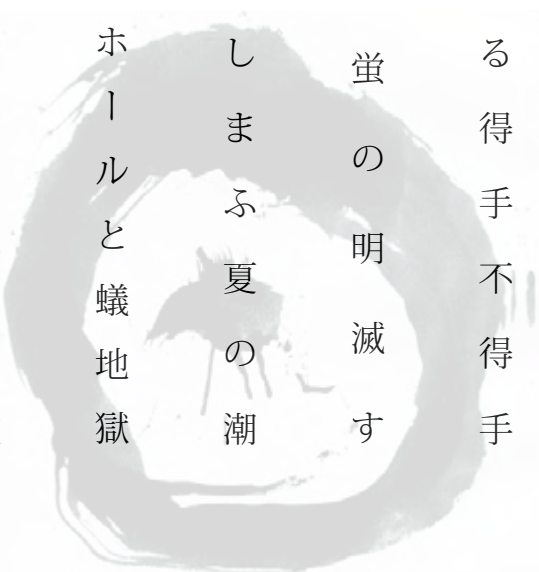


# ブラツクホール

高橋将夫

どの足が最初の一步大百足  
カンカン帽昭和が風に飛ばされる  
人の世に生き白シャツは汚さざる  
飛び込んで男となりし男の子

祖先の血祭太鼓が呼び覚ます  
石清水匂ひも色もなく淋し  
三伏や仏にもある得手不得手  
心音に合はせ蛍の明滅す  
航跡をゆがめてしまふ夏の潮  
宇宙にはブラックホールと蟻地獄  
空間と時間しかない夏座敷



# 槐安集

水野恒彦

初蟬の太虚にむけて鳴きたてる  
我影に島影ふれてゆく青野  
うす闇に地のこゑありて銀龍草  
命しづかに立ち尽す瀧の裏  
暗黒エネルギー加速し梅雨の星

加藤みき

泰山木青き夜空に花連ね  
蛍袋しろがねの光抱きをる  
夕端居一陣の風また止みて  
ばつさりとダチュラの花の切られたる  
大夕焼をとこ長長佇めり

中島陽華

大南風白き素足を愛しめり  
若返る箸とや島の夏大根  
やせたねと云ふはインコか青嵐  
しんがりは銀河の芯や大花火  
塩梅の頬に出でたる忘れ草

竹内悦子

射干や桐の箆筥に採す書  
八月のシャッター降りし鉄工所  
純白のさるすべり咲く足湯かな  
梅雨明けか釈迦釈迦と蟬のこゑ  
花芭蕉雲が大きく動きをり



雨村敏子

青田風母と並んで歩きけり  
弓形の胡瓜胡弓の音のする  
力瘤などうつちやらかして西瓜食ぶ  
笛吹きの蛇躍り出す千一夜  
クロスワードの鍵狂ひだす熱帯夜

本多俊子

晩節といふ未来きたりぬ七変化  
八月や空がささやく空の声  
赤蝮この日男と女かな  
尺八に無窮の響き天の川  
夏の闇蔵書何かを囁けり

近藤喜子

未来へと過去ぬぎ捨てし蟬の羽化  
炎昼や貝の舟おく砂の波  
青白き妬心わが壺中の蛇  
月光を編み込み込み烏瓜の花  
海の面の祈りのブルーー晩夏花

瀬川公馨

出番前汗だくだくの舞台裏  
泥にゐて遊戯三味の河童轟  
南より苦瓜姫の来たりけり  
打ち水や軒の猿頬仰天す  
妖怪の釣りをしてをる天の川

久保東海司

盜泉の水は好まず螢舞ふ  
草螢水に誘はれ低く輝る  
おほかたは百姓暮し稲の秋  
急行の通過待つ駅秋ざくら  
背を流すごとく墓石洗ひをり

柳川 晋

長刀や銚結界に来て止まる  
山椒魚はんざきが人工能を狂はせる  
飛魚となりし醜き驚の子  
田を売りぬ母の抜きたる田の草も  
玉虫の本音は一途なりしなり

熊川 暁子

水琴窟三拍置いて梅雨明け  
風死して小さき羽音を捕へけり  
老鶯の一と節谿を深うせり  
声明の業剥いでゆく苔の花  
抽出しに怠惰の詰る極暑かな

寺田 すす江

木洩日のまどひて沈む苔の花  
艫の音のひたひた寄せる天の川  
天帝に一花を捧ぐ白木槿  
あと少しなどと云はずに蚯蚓鳴く  
羽抜鷄百の言葉の空しくて

岩下芳子

蹠をうんと広げて泳ぎけり  
生き物の水あるところ水遊び  
うろくづや海月の見せる底心  
遠浅や穴掘る蟹のご一行  
青柿のよんどころなく落ちにけり

近藤紀子

夏野菜と鋏の音が籠の中  
瓶にさす鬼灯の朱の日々に増す  
瑠璃へだて蛙の青き呼吸見し  
ががんぼの片足半紙の上にある  
水無月の杜より草木の吐息かな

岩月優美子

開き切りやがて虚しき水中花  
迅雷に能面の眉動きしか  
海開き神官の衣の靡きをり  
とこしへに「考える人」晩夏光  
星涼し世の喧騒を消すやうに

竹中一花

物怪を誘ふ夏霧くらべ暗部山  
三白草包むや英字新聞紙  
あぢさゐのハートは青き影を持つ  
あぢさゐのハートハハート型のあぢさゐ  
潮風や向日葵遠き島を向く  
阿波踊手足たちまち蛸になる

前田美恵子

金風を懐に抱き大志だき  
核心を衝かれて帰る炎天下  
大川の風に太りし梅雨茸  
生駒嶺を見せて吊りたる目白籠  
居眠りの人ちらほらと夏期講座

中田禎子

軍神は女なりけり夏木立  
海底へ向く新幹線夏の空  
ガスかかる三本木原南部馬  
ジャズ流れゐて天井に扇風機  
高階の窓カクテルのさくらんぼ





# 槐市集

田中美恵子

朝畑の楽しからずや生身魂  
隙間より猫覗きをる半夏生  
藁塚のひとつ置かれてありにけり  
大胆に活けてをりけり梅もどき  
踊り子の今や還暦輪の中に

時 澤 藍

夏草を負かして肉刺を数へけり  
梅雨空や不吉な予言鴉鳴く  
「暑いね」と言へば「暑い」と返しけり  
七夕や人の数だけある願ひ  
昼寝覚めすつきりはつきり薄荷糖

中 貞 子

朝取りの刃を弾きける赤茄子  
七夕竹と決めて帰りし散歩道  
向日葵や幼のくれし金メダル  
白玉や鍾馗見下す京町屋  
猫の目や奥底暗き真葛原

中 島 昌 子

朝蟬やエプロン固く締め直す  
梅雨明を告ぐ予報士のワンピース  
たくさんの箇条書ある夏休み  
何ゆゑに土下座してをる墓  
ざわめきの一瞬済えし揚花火



中谷富子

昆布だし効し味噌汁朱夏の朝  
帰郷せしわれに蛙の大合唱  
ガリバーの足となりけり蟻つぶす  
名水の流れにそうて踊りかな  
鱧食べに三条大橋渡りけり

中堀倫子

夏風につかれる身体心地よし  
お揃ひの赤い麦藁帽子かな  
いつもより多目に炊くや露ごはん  
夏山にたなびく雲を見てみたり  
向日葵や朝のしくじり笑ふなり

中西厚子

群衆を泳いでをりしだんじりや  
舷ふなばたに形代の貼り付いてをり  
片蔭を遮ぎつてをる水子地蔵  
太陽が怒りを振り撒く極暑かな  
砂浜に単足袋の形かた続きをる

橋本順子

神在す島をへだてし夏怒涛  
蘇鉄の花若沖の鶏過りけり  
線上に夏日私尾瀬にをる  
水槽の海月ふはりと海月避く  
緑蔭に我が影つれて入りにけり

平野多聞

練供養女の歴史垣間見せ  
鉾回し四条大橋引き連れて  
念仏は独りにさせぬ夜の蟬  
月涼し南無阿弥陀仏の墨の色  
蝮姑鳴くやひとことを泣く我もまた

藤田美耶子

緑陰にゆりかごのごと指定席  
クリスタルビルは姿見雲の峰  
一人旅おほむらさきの後につき  
白無垢の螢袋に隠れんか  
沙羅の花選ばぬ道のありにけり

# 槐集

## 高橋将夫選

朝涼あさすずの風をサラダにさつと混ず  
大阪 有松 洋子

井戸水に浮いて子供を待つ西瓜  
雨女ときをり虹を独り占め  
人ふつと表情無くす風死して  
黒揚羽群れ舞ふここが爆心地  
乾涸ぶる海星玩具に変はりけり  
身を裂きて我は生まれし蟬の殻  
奪ひ取り輝く人よ凌霄花  
吐き捨つるあの世なんてと生身魂  
夜光虫 太古人には異能あり  
海峡に金の航跡夕焼くる  
涼しさにいざ漕ぎ出でな芭蕉翁  
ぬぐはれて黴より出でし四神の竜  
追想のクレオパトラよ薔薇の風呂  
仏心を水に映せり半夏生

江島 照美

藤田美耶子

老い耄れは浄土の蓮となるつもり  
大阪 平野 多聞

老鶯の一節きかす佐渡おけさ  
ひとり居の熱き思ひを冷酒で  
蚯蚓鳴くしらせしこの世をありのまま  
蟪蛄こやいつしか隣は核の国  
千年の魑魅すだまひしめく木下闇  
鳴き抜いた空蟬の何と軽きこと  
岡崎 犬塚李里子  
精一杯開く檜扇わが季と  
黄泉の扉のうつすら開き梅雨深し  
空蟬はこの世の名残カタルシス  
八百万の神に感謝の打水す  
枚方 中 貞子  
御破算と願ひましては昼寝覚  
噴水のひと息つきてまた元氣  
手にいつも団扇の妣へ風送る  
炎天へ柝車音なく発ちにけり

朝涼の風をサラダにさつと混ず 有松 洋子

朝の涼しい風をサラダに混ぜるといふ、この作者ならではの感性の一句。

〈人ふつと表情無くす風死して〉の句は、風の動きに対する表情の変化を見事に捉えている。

〈井戸水に浮いて子供を待つ西瓜〉の句は、「西瓜が子供を待つ」という発想が面白い。〈兩女ときをり虹を独り占め〉の句、兩女にも役得があるのだ。黒揚羽群れ舞ふこが爆心地では、爆心地への思いが黒揚羽の群れに込められている。

以上、どの句も簡潔に核心を捉えている。

乾涸ぶる海星玩具に変はりけり 江島 照美  
干乾びた手で遊ぶ子供の姿がほほえましい。子供の手にかかれば何でも玩具に変わるのだ。

〈身を裂きて我は生まれし蟬の殻〉の句、蟬も人も身を裂て生まれる。

〈奪ひとり輝く人よ凌霄花〉の句のようなこともあるのが世。〈夜光虫太古人には異能あり〉の句、人は進化の一方で失った能力もあるのは確か。どの句も真実。

〈吐き捨つるあの世なんてと生身魂〉の句、「あの世なんてとうそぶく生身魂。内心じくじたるものがあるように思えてらな

ぬぐはれて微より出でし四神の竜 藤田美耶子  
微を拭ったら青竜が現れたという大景。実際は、四神（青竜、白虎、朱雀、玄武）の内の青竜の絵がきれいに浮き出たという遺跡の話であろう。

〈海映に金の航跡夕焼くる〉と〈追憶のクレオパトラよ薔薇の風呂〉の句は美しいルネサンスの絵画を見るようだ。

〈仏心を水に映せり半夏生〉は水に仏心が映る精神の風景。

老い耄れは浄土の蓮となるつもり 平野 多聞  
「老い耄れ」と自分を卑下しながら、「浄土の蓮となるつもり」とはなかなかの御仁。

〈老鶯の一節きかす佐渡おけさ〉の句も同様で、佐渡おけさの一節は「老鶯」ならではの味がありそう。

〈蠮螋やいつしか隣は核の国〉の句は、蠮螋の斧のように核を振りかざす隣国への警告。

鳴き抜いた空蟬の何と軽きこと 犬塚李里子

「悔いなく鳴きつくした」のだろうと思ひながら、軽い空蟬を手をしている作者の感性の一句。〈空輝はこの世の名残カタルシス〉は掲句とセットで鑑賞したい。

八百万の神に感謝の打水す 中 貞子  
色んな「打水」の句を見たが、「八百万の神に感謝」は類がない。打水に対する作者の素直な気持なのだと思ふ。

〈以下略〉